

# 思春期の子どもの変化における 「子どもの行動理解」という母親の経験

河内 浩美<sup>1)</sup>・佐山 光子<sup>2)</sup>

Key words : 思春期, 母親, 経験

**要旨** 目的：思春期の子どもの変化における母親の経験プロセスを質的研究によって浮き彫りにし、その構造を記述すること。対象：思春期の子どもをもつ母親である。方法：グラウンデッド・セオリー・アプローチによる質的記述的研究である。結果：【子どもの行動理解】という現象をコアカテゴリーとし、＜子どもの反抗への気づき＞＜子育て観の実践＞＜子どもとのやりとり＞＜子育て観への気づき＞＜子どもを知る努力＞＜子どもの立場に立つ理解＞＜子ども理解の思い違い＞＜子離れ＞＜抑制の緩和＞＜信じる＞＜子どもの行動変化の察知＞＜子どもの順応に向けた関係構築への歩み＞のサブカテゴリーが抽出された。【子どもの行動理解】は、＜子ども反抗の気がかり＞によりもたらされ、母子間の葛藤から生じる親子関係の変化は、子どもの発達に合わせた対応の変化により【子どもの行動理解】を介し、＜子どもの順応に向けた関係構築への歩み＞に至るストーリーラインが見いだされた。

## I. 緒言

子どもが成長発達を遂げるにあたり親の存在は、様々な影響を与える要因の一つとされている。

現代の親たちは、親自身の成長発達過程において生活経験の乏しさから子育ての学習機会が十分でないまま親となり子育てをしている。また、親役割の特徴として幼児期からしつけ行為や社会化行為、早期からの教育行為の開始など質的に複雑化し、教育期間の延長に伴う親役割の延長<sup>1)</sup>といった様に子どもの成長発達に合わせ親役割の変化が求められる。更に、親たちは夫婦役割、仕事上の責任など複数の社会的役割を引き受けながら自己の見直しが必要とされるなど親自身のアイデンティティの変容課題に向けた対応が必要とされるのである。

しかし、子育ての学習経験が十分ではない親たちにとって、この様な多様な変化に対応していくことは容易なことではない。思春期の子どもを持つ親に関する先行研究では、子どもの二次性徴の発現による性的発達に対して、戸惑いや親としてどのように関わればよい

のか不安を感じている<sup>2),3)</sup>ことが明らかにされているが、その数は少なく、これまでとは異なる成長発達をとげる思春期の子どもを持つ親の立場に立った研究は十分とは言い難い。

以上より、思春期における子どもの変化をとらえる親自身のプロセスを理解することは、親のニーズのアセスメントの根拠となり、ニーズに即した支援の提供に示唆を与えることができると考える。そこで、本論文は、母親に着目し思春期の子どもの変化においてどのような経験をしているのか、そのプロセスを質的研究によって浮き彫りにし、母親の思春期の子どもの変化における経験として抽出された母親の子どもへの行動理解におけるプロセスについて報告する。

## II. 研究方法

### 1. 研究デザイン

質的研究

1) 東京医療保健大学医療保健学部看護学科

2) 新潟大学医学部保健学科

平成27年3月25日受理

## 2. 研究参加者

二次性徴が著明となる小学校5年生以降の長子をもつ母親とし、有する子どもの数及び性別は問わないとした。

研究参加の募集は、協力を得られた小学校2校、地域の母親が集まる機会として1グループ、スノーボール式により同意を得られた母親5名であった。母親の平均年齢は43.6±1.52歳であり、5名ともに有職者であった。

## 3. 用語の解説

用語を以下のように規定した。

**思春期**：身体的ならび性的成長に限定せずに心理、生活、社会的適応過程を含む全人的な観点の意味合いを含む概念。

**経験**：親自身が知覚する意識そのものに留まらず、子どもや家族などの他者や社会との間に存在する相互作用プロセスを意識化して自分のものとしていること。

**思い**：思いの対象について「思う心の働き・内容・状態」をいい、様々な感情あるいは意味合いを含む概念。

**子どもの行動理解**：子どものふるまいや行為の理由を了解すること。

## 4. データの収集内容と方法

データの収集は、インタビューガイドを用いて「子どもの思春期への思い」「思春期における子どもとの関わり」に関連し半構成的面接法を行った。思春期の子どもの変化への語りについては、どのような捉えをしているのか思いが表出できるように関わりをもった。面接回数は1回、時間は1時間程度とし、参加者の許可を得て録音した内容を逐語録に起こした文字記録を分析データとした。

## 5. 分析方法

母親の思いや他者らとの相互作用、経験に焦点を当てることにより、母親の観点あるいは枠組みから理解を深めることができるグランデッド・セオリー・アプローチ<sup>4),5)</sup>を用い、質的分析を行った。なお、分析過程においては、常にデータおよびプロパティやディメンションに立ち返り分析を進め、質的研究に精通した母性看護学の専門家よりスーパーバイズを受けたことで信頼性と妥当性の確保に努めた。

## 6. 倫理的配慮

平成23年5月9日に新潟大学大学院保健学研究科研究倫理審査委員会から承認(承認番号81号)を受けた。研究参加予定者へ、研究の目的と意義、参加への自由意志の保障と途中辞退の権利、参加による利益と不利益、プライバシー保護、研究結果の公表方法などについて文書と口頭にて説明を行った後、同意を得た上で面接を行った。

## Ⅲ. 結果

研究参加者の概要については、表1に示す通りである。

表1 研究参加者の概要

ID	面接時間(分)	年齢(歳)	就業	配偶者	第1子		第2子		第3子	
					年齢	性別	年齢	性別	年齢	性別
A	118	44	有	有	17	女	7	女	7	女
B	90	45	有	有	20	男	17	女	16	男
C	91	42	有	無	20	女	17	女	14	女
D	80	42	有	有	21	女	20	女	15	男
E	60	45	有	有	23	女	21	男	16	女

### 1. データの概要

思春期の子どもの変化における母親の経験について、5人の母親のデータから357のコードおよび91のカテゴリーが抽出された。1人目の母親のデータより抽出されたカテゴリーにおいて、「状況」「行為/相互作用」「帰結」で構成されるパラダイムを用い、カテゴリーを現象毎に分類し構造とプロセスを見出し、関連図を作成した。2人目以降も同様に分析を行い、同じ様な内容を示すカテゴリーが基となる現象のカテゴリー関連図を統合させた(図1)。その結果、母親の経験プロセスとして【子どもの行動理解】という現象をコアカテゴリーとし、12のサブカテゴリーが抽出された。以下【】コアカテゴリー、《》サブカテゴリー、<>各事例におけるカテゴリーを示す。

### 2. 母親の子どもの行動理解についてのカテゴリー関連図

#### 1) カテゴリーの統合

パラダイムは、「状況」として《子どもの反抗への気がかり》、「行為/相互作用」として《子育て観の実

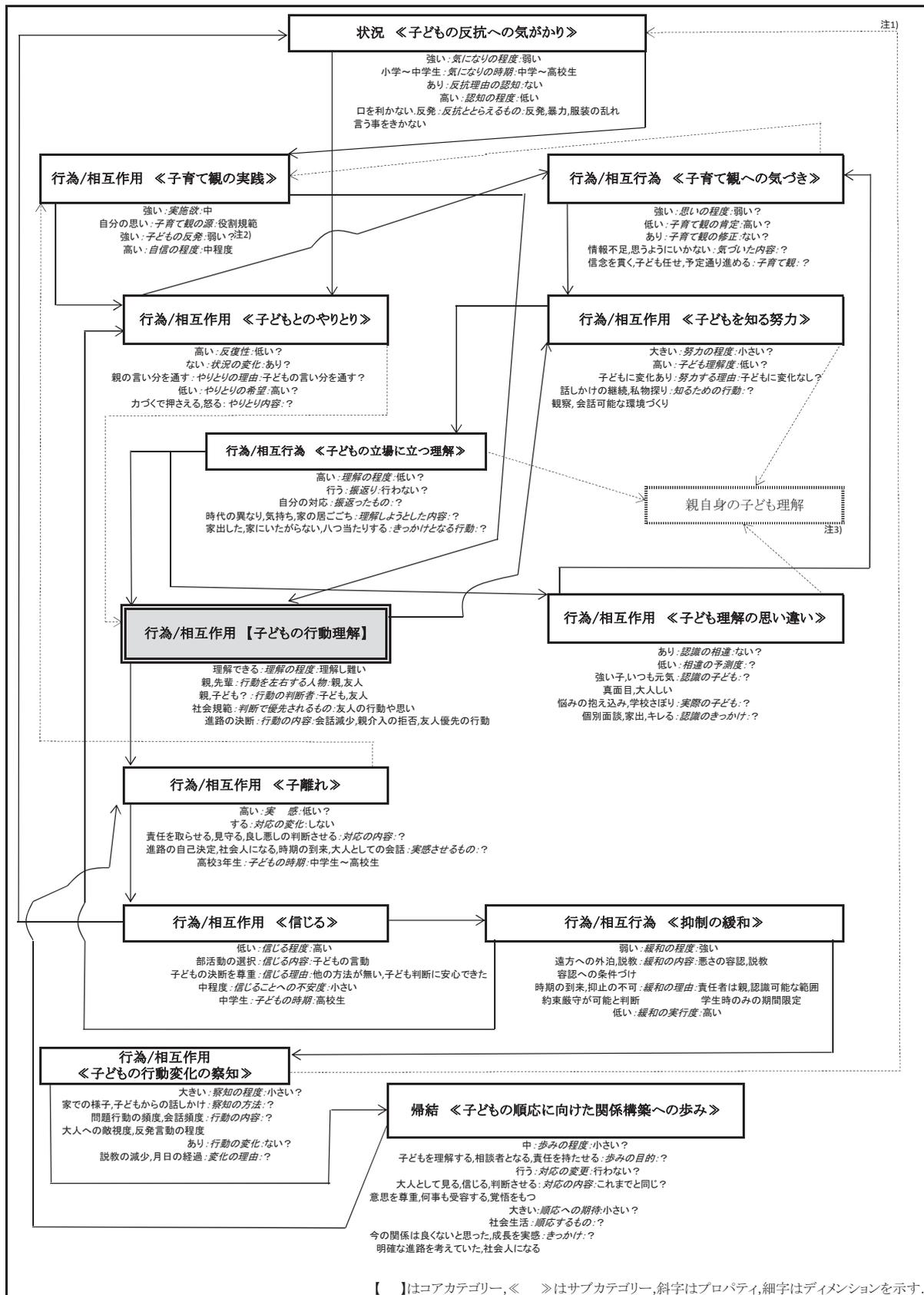


図1 子どもの行動理解に関わるカテゴリー関連図

践》《子どもとのやりとり》《子育て観への気づき》  
 《子どもを知る努力》【子どもの行動理解】《子どもの立場に立つ理解》《子どもの理解の思い違い》《子離れ》《抑制の緩和》《信じる》《子どもの行動変化の察知》、「帰結」として《子どもの順応に向けた関係構築への歩み》と位置づけられた。なお、カテゴリ関連図に破線で記した部分は、今回のデータでは語られていなかったが、主なプロパティとディメンションより推測し記述した。

## 2) ストーリーライン

コアカテゴリおよびサブカテゴリより構成された関連図について、相互の関連性を踏まえストーリーラインとして以下に記述する。“ ”はプロパティを示す。

母親の《子どもの反抗への気がかり》は、口を利かないや言う事をきかないことを“反抗ととらえるもの”とし、“反抗理由の認知”があり、反抗への“認知の程度”が高く、“気になりやすい程度”が強いことで、《子どもとのやりとり》へ移行していた。《子どもとのやりとり》において、親の言い分を通すことを“やりとりの理由”とし、怒るといった“やりとり内容”を、“反復性”の高いやりとりを行っても、“状況の変化”がないと《子育て観への気づき》へ至っていた。

母親の《子育て観への気づき》では、信念を貫くといった“子育て観”を、思うようにいかないこと等を“気づいた内容”として挙げていた。更に、“子育て観の肯定”が低く、“思いの程度”が強く、“子育て観の修正”があることにより《子どもを知る努力》へつながっていた。

《子どもを知る努力》として、子どもに変化があることを“努力する理由”として始め、“知るための行動”として話しかけの継続や子どもの私物を探り、観察や会話可能な環境をつくることで、“子ども理解度”が高くなると《子どもの立場に立つ理解》に至っていた。

《子どもの立場に立つ理解》は、子どもの家出や八つ当たりとした“きっかけとなる行動”により、子どもの気持ち等を“理解しようとした内容”としていた。そのため“振返り”をおこない、“理解の程度”が高いことにより、【子どもの行動理解】もしくは《子ども理解の思い違い》に至った。そして、《子ども理解の思い違い》は、“認識のきっかけ”として家出やキレるといったことから、真面目等の“認識の子ども”において悩みの抱え込みといった“認識の相違”があり、“相違の予測度”が低いことにより、再び《子育て観への気づき》へ至っていた。

一方《子どもの反抗への気がかり》において、反発や服装の乱れを“反発ととらえるもの”とし、“反抗理由の認知”がなく、反抗への“気になりやすい程度”が弱いことで《子育て観の実践》へとつながっていた。また、《子育て観の実践》が、実践の“実施欲”が強く、“自信の程度”が高く、“子どもの反発”が強いことにより、《子どもとのやりとり》へ至っていた。その後は、やりとりの“反復性”が高く、“状況の変化”がないと《子育て観への気づき》となり、“子育て観の修正”があることにより《子どもを知る努力》を行っていた。また、“子どもの理解度”が高くなることで、《子どもの立場に立つ理解》をおこない、【子どもの行動理解】へ至っていた。しかし、《子育て観の実践》が、役割規範を“子育て観の源”とし、“自信の程度”が中程度であると【子どもの行動理解】へ至っていた。

次に、【子どもの行動理解】は、子どもの“行動の内容”が進路の決断であり、“判断で優先されるもの”が社会規範であり、“行動を左右する人物”が親や先輩であることで、“理解の程度”が理解できることによつて、母親の《子離れ》へとつながっていた。しかし、【子どもの行動理解】において、子どもの“行動の内容”が、会話減少や親介入の拒否、友人優先の行動であり、“判断で優先されるもの”が友人の行動や思いであり、“行動を左右する人物”が親や友人であることで、“理解の程度”が理解し難いと、再び《子どもを知る努力》に至っていた。

母親の《子離れ》において、“子どもの時期”が高校3年生であり、進路の自己決定や社会人になることや大人としての会話といった“実感させるもの”により、“対応の内容”が責任を取らせるや見守るとした“対応の変化”をおこない、子離れの“実感”が高いことにより、更に子どもを《信じる》ことにつながっていた。

子どもを《信じる》ことでは、“子どもの時期”が高校生であり、“信じる理由”を他の方法がないこと等から、子どもの言動を“信じる内容”とし、“信じる程度”が高く、“信じることへの不安度”が小さいことで《抑制の緩和》に至っていた。しかし、“子どもの時期”が中学生であり、“信じる程度”が低いと再び《子どもの反抗への気がかり》へ至っていた。

子どもに対する《抑制の緩和》は、“緩和の理由”を責任者は親であるとし、説教といったことを“緩和の内容”としていた。“緩和の程度”が強く、“緩和の実行度”が高いことで《子どもの行動変化の察知》へつながっていた。しかし、“緩和の理由”が抑止の不

可と判断とし、容認への条件づけ等を“緩和の内容”としていた。“緩和の程度”が弱く、“緩和の実行度”が低いと、再び《子どもとのやりとり》に至っていた。

母親の《子どもの行動変化の察知》は、“行動の内容”として問題行動や会話の頻度、大人への敵視度や反発言動の程度において、家での様子や子どもからの話しかけといった“認知の方法”により、“行動の変化”があり、その“変化の理由”を説教の減少や月日の経過ととらえ“察知の程度”が大きいことにより《子どもの順応に向けた関係構築への歩み》という帰結に至っていた。

《子どもの順応に向けた関係構築への歩み》という帰結において、成長を実感したことや社会人になるといった“きっかけ”から、“歩みの目的”が子どもを理解することや責任を持たせることであり、“対応の内容”として大人として見ることや判断させる、意思を尊重することや信じるなどにおいて、“対応の変更”をおこない、“順応するもの”が社会生活であり、“順応への期待”が大きいことにより、更なる《子離れ》へと至っていた。なお、この現象の中における「順応」とは子どもが社会生活に適応する対応の変化をすることを意味している。

#### IV. 考察

母親の【子どもの行動理解】は、《子どもの反抗への気がかり》によりもたらされ、《子どもとのやりとり》を介し【子どもの行動理解】に至っていた。また、【子どもの行動理解】は、《子離れ》を意識した対応となり、子どもの《行動変化の察知》を介し、社会への《子どもの順応に向けた関係構築への歩み》を始めていることが示された。《子どもの反抗への気がかり》によりもたらされる、母子間の葛藤から生じる親子関係の変化は、子どもの発達に合わせた対応の変化により【子どもの行動理解】を介し、《子どもの順応に向けた関係構築への歩み》に至るといふプロセスが現象として示された。

思春期における親子関係は、子どものアイデンティティの確立や精神的健康など、子どもに影響を与えており<sup>6,7)</sup>、子どもの成長において親子関係を欠くことはできない。また、パーソンズ<sup>8)</sup>が示すように「家族は、人間のパーソナリティをつくり出す“工場”」でもあり、家族の中で子どもは価値や規範、行動様式を習得しながら発達していくものであるとされている。

本研究における親子関係の変化は、母親の子どもの

反抗への気がかりが、これまでと異なる子どもの様子をとらえるきっかけとなる。そして、思春期特有の二次性徴の生物学的変化や、自我形成にむけた親への反抗といった心理学的変化、母親自身が思春期であった頃の経験等が要因となり、親子関係に危機的な葛藤が起こる<sup>9,10)</sup>とされるように、母と子のに起こった葛藤による関係の不安定さから、これまでと同様な安定した関係改善に向け、右往左往する母親の様子が窺える。そして、子どもとの関係の改善に向けた子どもとのやりとりにおいて、母親は自身の子育て観を振り返り、子どもの行動理解を進めるために、子どもへの対応を変化させているのである。これは、子どもの発達に対応し親役割も変化させていかなければならない親役割の課題に向けた母親の対応の一つを示すものであると考える。

また、子どもの行動理解をすることで子離れを意識した対応では、「相談に際し、信頼できる親であると同時に自分を受け入れてくれるような親の態度が重要」<sup>11)</sup>とされるように、子どもを信じることで、抑制の緩和をおこない、それが子どもの行動変化の察知へと至るプロセスとして示されていた。

しかし、結果に示された「子どもを知る努力」「子どもの立場に立つ理解」「子どもの行動理解」「子離れ」「信じる」のような母親の対応により、必ずしも、子どもの行動変化に至るわけではない。それぞれのサブカテゴリーに示された行為において、母親は「友達関係と対応についての不安、学校生活と子どもの行動についての不安、子どもの発達について適した接し方ができているのだろうか」といった思春期特有の子育て不安<sup>2)</sup>を常に抱えながら、子どもとのやりとりを繰り返すことで、子どもに合わせ対応を変化させている母親を示すものとする。

#### V. 結語

##### 1. 結論

母親の思春期の子どもの変化における経験プロセスは【子どもの行動理解】という現象をコアカテゴリーとし、＜子どもの反抗への気がかり＞＜子育て観の実践＞＜子どもとのやりとり＞＜子育て観への気づき＞＜子どもを知る努力＞＜子どもの立場に立つ理解＞＜子ども理解の思い違い＞＜子離れ＞＜抑制の緩和＞＜信じる＞＜子どもの行動変化の察知＞＜子どもの順応に向けた関係構築への歩み＞のサブカテゴリーが抽出された。

## 2. 本研究の意義

母親に着目し子どもや社会などの間に存在する相互作用における母親の思春期の子どもの変化における経験プロセスの記述は、本研究独自のものである。

また、記述化された現象は、母親の「経験」の共有を可能とし思春期の子どもを持つ母親の深い理解につながり、母親のニーズに即した支援の検討に示唆を与えると考える。

## 3. 研究の限界と課題

参加者数が5名であり経験のプロセスにおいて予測で示された箇所が存在している。そのため今後の課題は、更なるデータの集積と分析を行う必要がある。

本研究へ参加頂いた皆様に深く感謝いたします。本論文は、2012年度に新潟大学大学院保健学研究科に提出した修士論文の一部に加筆・修正したものである。

## VI. 引用文献

- 1) 木村敬子:子ども社会シリーズ1 子どもと家族. 住田正樹, 武内清, 永井聖二(監): 親になるということ. 学文社, 2010, 東京, p133 - 141.
- 2) 齋藤益子, 木村好秀, 宍戸章予: 中学生を持つ親の二次性徴発現時の子どもへの関わりおよび性に関する子どもとの会話に関する検討. 思春期学. 2005; 23(1): 154-160.
- 3) 齋藤益子, 木村好秀, 関島英子: 中学生を持つ親の性意識. 思春期学. 2004; 22(2): 268-274.
- 4) 戈木クレイグヒル滋子: グラウンデッド・セオリー・アプローチ 理論を生みだすまで. 新曜社, 2008, 東京.
- 5) 戈木クレイグヒル滋子: 実践 グラウンデッド・セオリー・アプローチ 現象をとらえる. 新曜社, 2008, 東京.
- 6) 楊井美悠規. 愛着が青年後期のアイデンティティ形成におよぼす影響—母親の親役割行動との関連—. 臨床教育心理学研究. 2007;33(1):97.
- 7) 高見三奈, 佐藤幸子, 塩飽仁. 親の役割受容と親役割行動が子どもの評価する家族機能と精神的健康に与える影響. 日本看護研究学会雑誌. 2009;32(2):55 - 63.
- 8) パーソンズ, T.・ベールズ, R.F., 爪貞雄, 溝口謙三他訳: 核家族の子どもの社会化. 黎明書房, 1970, 愛知.
- 9) Spranger, Eduard, 原田茂訳: 青年の心理. 共同出版, 1973, 東京.
- 10) 加藤隆勝: 青年期の意識構造. 誠信書房, 1987, 東京.
- 11) 田川真理子, 宮崎麻理子, 池田明美, 他. 二次性徴の発現に伴う性の悩みと親子関係. 母性衛生. 2001;42(1):34 - 42.

## Experience of the mother "Understanding of child's behavior" in an adolescent child changes

Hiromi KAWAUCHI<sup>1)</sup>, Mitsuko SAYAMA<sup>2)</sup>

1) Faculty of Healthcare Division of Nursing, Tokyo Healthcare University

2) School of Sciences, Faculty of Medicine, Niigata University

*Key words* : Adolescence, mother, experience

**Abstract** Objective: To describe the process of the experiences of mothers in regard to changes in children during adolescence. Subjects: Mothers of adolescents.

Methods: A qualitative, descriptive study using the grounded theory approach.

Results: The following categories were identified for the process of experiences of mothers: the core category of "understanding of the child's behavior" and the following subcategories: "concern regarding the child's rebelliousness", "implementation of views on childrearing", "interactions with the child", "realization of views on childrearing", "efforts to get to know the child", "understanding through putting oneself in the child's shoes", "mistaken understanding of the child", "allowing the child to become independent", "reducing restraints", "believing", "sensing behavioral changes in the child", and "steps for building relationship toward adaptation of the child". A categorical relationship diagram was established based on these categories. "Understanding of the child's behavior" was induced by "concern regarding the child's rebelliousness", and the changes in the parent-child relationship resulting from conflict between the mother and child led to "steps for building relationship toward adaptation of the child" through "understanding of the child's behavior" based on changes in approach according to the child's development.

Accepted : 2015.3.25